

2010年11月26日(金)

6:00 ~ 7:00

ニューミヤコホテル本館 3F

資料1

月刊誌「みにむ」1999年10月号(9月15日執筆) 開倫塾の時間のページから

50歳から100歳までの過ごし方を考える

開倫塾

林 明夫

1. はじめに

男子77歳、女子84歳と、日本人の平均寿命が世界1水準まで伸びてきた。このような長寿は日本の歴史が始まって以来のこと、いや世界の歴史が始まって以来のことだ。そのため高齢社会をどのように過ごしたらよいか、誰も教えてはくれない。誰も教えてくれないので、その時々を「時の流れに身をまかせ」て過ごしてしまうことになる。そこで、せんえつなことであるが、今回は「50歳から100歳までの過ごし方」を考える。

2. 生涯現役がすべて

(1) 休日について

「50歳代は週休2日。60歳代は週休3日。70歳代は週休4日。80歳代は週休5日。90歳代は週休6日。100歳代は好きなだけ休日をとること。」これが私の休日についての考えだ。生涯現役とは「生涯働きつづける」ことを意味する。「働く」とは「物やサービス」を売って対価つまり「お金(現金収入)」を得ることを意味する。現金収入を得るために働く時間は一日何時間でもいい。とにかく、例えば以上のような休日の基準(目安)に従って、一週間に何日間か、自分の健康状態と相談して、現金収入を得る時間を作ることが大切だ。

(2) 「働く場所がない」「何をしたらよいかわからない」と思う人もあせらず「仕事を見つける努力」をすること。

日本人の平均賃金は世界でも最も高いといわれている。そのため世界最高水準の仕事内容が求められる。この点に目をつければ「世界最高水準の仕事をしている人々」を「サポート」する様々な「代行業務」は無数に存在し、いくらでもお金はかせげる。

仕事で忙しい人々が飼っている「猫にエサを与える」ことだって「仕事」になる。飼主が留守の日に「犬にエサを与える」サービスなど、大流行しつつある。「犬を散歩につれていく」ことまでできれば更に高収入が得られる。

「小学低学年の子どもが、学校から帰ってくるのを家で待っていてあげて、おやつを食べさせてあげること」も、立派な「ママさん代行業」だ。これに加えて一部屋でも掃除してあげ、週に何回か夕食でも作ってあげたら、泣いて喜ぶ人はたくさんいる。立派な「働くママ・子育て支援事業」といえる。

「朝早くおきてお弁当をつくってあげる」サービスや、「空いている庭を少しだけ手入れ」してあげるサービス。独身者や、家事としての掃除や洗濯・買物などをする余裕のない人の家を週に1回、2～3時間手伝ってあげることなど。

一日に1時間だけ電話番や店番をしてあげるサービス。経理が苦手な商店主の代わりに一日、1～2時間帳面つけをしてあげることなど。

- (3) 「やりたい仕事が決まったとしても、果たして私のような者にたのむ人がいるか、つまりお客様が見つかるかどうか心配。だからはじめから諦めて、何もしない。」というなら余りにも諦めが早すぎる。

知り合い100人にチラシをつくり頼みにいくこと。地域のミニコミ誌(この『みにむ』のような雑誌)や、各新聞に週に1回位入ってくる「PR版」の地域の新聞に「掲載」して頂くなど、PRの方法はいくらでもある。「シルバー人材センター」なども大いに活用させてもらうとよい。

「サービスや物を提供する相手を見つけること」つまり「お客様探し」は、一般用語では「営業」という。「どんなものをどのような形で売ろうか、どんなサービスをどのような形で提供しようか。」「提供するサービスや物」を考えたり作ったりすること以上に「お客様探し」つまり「営業」は困難を極めるのが普通だ。だからといって、客探しをあきらめてはいけない。ありとあらゆるルート、ありとあらゆる知恵を総動員するべきだ。

- (4) 身体や頭脳を鍛えること

一週間に何日か働くことの他に自分でやりたいことをいくつか決め、命つきるまでその道を極める努力を「意識的」に行うことが大切だ。どうせやるのなら「身体」や「頭脳」を無理のない範囲で目一杯鍛えられる内容を選んだ方がよい。「ボランティア活動」がやりたいことの中心なら、自分の選んだボランティア活動に励むことは素晴らしい。高い見地に立っての「政治活動」や「宗教活動」も意味がある。「フラダンス」や「健康麻雀」も頭脳や身体を鍛えるものだ。「楽しみ」というレベルではなく目一杯非常に苦しくても命懸けでやってはじめて「身体」や「頭脳」は鍛えられる。

「身体」や「頭脳」を「鍛える」ことを意識的に行えば、必ず「その道」は「極め」られる。本当の「ライバル」や本物の「友人」も山ほどでき、人生の喜び、生きていてよかったという状態に自分をもっていける。

一つのものに対してある一定のレベルまで励むと、世の中の見方が深まることが多い。「激しい動き」はなくても、励めば励むほど頭は冴え渡り、本質にどんどん迫ることができる。「精神と自然」が一体となる「極致」に近づくまで目指すことさえ可能だ。

- (5) 「楽しいこと」や「リラックスできること」を「意識的」に「行いつづける」こと。

映画の好きな人は、自分の気に入ったジャンルの映画を好きなだけ鑑賞しつづけると「楽しい」。私などハリウッド映画以外の映画を見るのも好きだ。「インド映画」など毎月のように見たくなる。世の中には「楽しい」ことが結構あるのだと思う。ユーゴの「黒猫・白猫」、イランの「運動靴と赤い金魚」、イタリアの「踊れトスカーナ」など、ほのぼのとしていてよい。黒澤明や小津安二郎の全映画を少しずつ見直すのも面白い。

何歳になっても、友達を作ろうと思えばいくらでもできる。その時は、自分の年齢は一切言わないことだ。年齢を明かせば、相手は年齢差を意識してしまい、身構えてしまうからだ。友達が作りたかったら「ボーイ・フレンドやガール・フレンドを 100 歳までに 100 名作ろう」などと決意すればよい。友達になってもらいたいと思ったら、率直に「友達になって下さい」とたのめばよい。相手が「うん、いいよ」と言えば、その日から二人は一生の友達だ。年齢や男女、国籍や人種の区別のない「真の友達づくり」を 50 すぎたら心掛け、一生かけて大切にするとよい。

どこかに出かけるのが好きな人は、お金を節約してためこみ、どんどん、どこへでも行くとよい。一人でもいいし、行きたい人と行けばよい。あまり出かけると誰かに何かを言われるなどと思わない方がよい。「元気で楽しく生き生きしていること」を喜ばない人はいないからだ。行き先は隣の町でもいいし、南アフリカのケープタウンでもよい。

(6)まとめ

自分の体調に応じ休日や労働時間を考え、現金収入をたとえ 1 円でも得るよう努力して仕事を探すこと。「自然と精神」が一体として感じられる位まで「身体と頭脳」を無理のない範囲でたえず鍛え上げること。自分にとって楽しいことやリラックスできることは何かをよく考え、積極的に行いつづけること。

以上の三つが 50 歳から 100 歳までの過ごし方として私がおすすめる方法だ。ただ、実際にやるには、かなりの準備期間が要るものも多い。60 歳からやりたいことは、50 歳になったら考えはじめ、10 年かけて準備するとたいがいは実現する。昔と違って今は、人生は長いからあせることはない。じっくり考え、じっくり準備をして、せめて 100 歳までは自分の理想の人生を送ってほしい。

(7)「50 歳過ぎたら、100 歳までどう自分の人生を過ごすかを真剣に考えるべきだ。医者や福祉関係者にはあまり世話にならない(つまり税金の再配分を自分はあまり受けない)ような元気な身体づくりを、自らの努力で行うことを理想に掲げるべきだ。」これが私の提案。

3. おわりに - 「税金の再配分」を考えよう -

(1)「銀行を救済するのに 10 兆円以上も税金を使うのに、60 歳以上の人々のための医療費を削るのはおかしい。一定の期間がくると病院から追い出され、次の病院を探している人がたくさんいる。」これは「税金の再配分」の方法の問題つまり「政治」の問題。投票で選ばれた「国民の代表」は「死に最も直面している」人々の医療をどのように行うかを、国家や地方公共団体の「税金の再配分」の問題として徹底的に討論して頂きたい。そして、銀行の救済が、死に最も近い人の医療費より大事と判断するなら、その意味を十分説明しないと、納税者は納得しない。

(2)ただ、入院が必要な人を病院から追い出すような「税金の再配分」の仕方は、どう考えても間違っている。医師や医療関係者、福祉関係者は、これらの人をよく追い出せるものだと思う。福祉の推進を政策に掲げて当選した議員や首長はよく平気でいられるものだと思う。

(3)膨大な内容の「地方分権推進法」が成立し、内閣は 10 年以内に国家公務員の 25%削減を宣言した。国の役割、地方の役割を根本のところから考えなおし、大不況で税収が減っても年老いた病人が病院から追い出されないような「税金の再配分」の方法を論議すべき時期が来た。みんなで知恵を出し合い、元気に生き抜きましょう。

上智大学で考える

開倫塾

林 明夫

1. はじめに - 我が街から一人も失業者を出さないために -
- (1) 「桐生の着倒れ、足利の食い倒れと言われている。林さんは足利から来ているので、足利の食文化について来週報告して下さい」と、上智大学公開学習センター(コミュニティー・カレッジ)研究コース「カルチャー・マーケティング」の研究会で、上智大学経済学部長の田中利見教授から4月18日に指示をされた。そこで、非常にバイアスのかかった見方かもしれないが、私は次のような報告をした。
 - (2) 足利のそばがうまいのは、一茶庵の影響が大きい。足利でおそば屋さんをやろうとする人は一茶庵に修行に行くか、何日も一茶庵を訪れて、自分がおそば屋さんをやる時には、一茶庵に一步でも近づこう、できれば乗り越えようとして懸命努力をする。市民も、一茶庵を通じておいしいおそばを知っているので、ある一定レベル以上のおそばしか評価をしない。だから、足利のおそば屋さんは、どこへ行ってもおいしい。一定レベル以上の店ばかりだ。
 - (3) お隣の桐生には、スズキというフランス料理屋さんがある。桐生で洋食屋さんをやろうとする人は、スズキで修行をさせてもらうか、お客として何回も食べに行く。スズキに追いつき追い越せという強い意思があるためである。だから、桐生の洋食屋さんは、ある一定レベル以上のところが多い。
 - (4) 佐野には森田屋さんというラーメン屋さんがある。佐野でラーメン屋さんをやろうという人は、同様に森田屋さんを目標に、追いつき追い越せと頑張る。佐野市は日本でも有数のラーメンの街となった。ラーメンと大盛りラーメン、チャーシューメンと大盛りチャーシューメンと、あと1~2品しかやっていない店も多い。味は微妙に違うが、一定レベル以上いっている店が多く、店の前には列ができるところも多い。
 - (4) 宇都宮では、フランス・レストランのオーベルジュの影響が大きい。宇都宮で洋食レストランを目指す人の多くが、オーベルジュを訪れ、追いつき追い越せと頑張る。ギョーザも同様で、香蘭や、みんなに追いつき追い越せと頑張ったお陰で、どこのギョーザ専門店も、店の外まで列ができています。宇都宮グランド・ホテルの、本格的な本場中国ギョーザのフルコースも大好評と聴く。
 - (5) 黒磯のカフェ・ショーゾーは、いつ行っても店の外までウェイティングの人があふれている。那須高原や黒磯の喫茶店の雰囲気が良いのは、ショーゾーの影響が大きい。
 - (6) このように、ある街に行くとか何かうまいと言われるまでになるには、リーダーとなるお店の血の出るような内容充実の努力があり、それを周りの店が追いつき追い越せと切磋琢磨(せっさたくま)することによる場合も多いのではないかと。大旨以上のような発表をした。
 - (8) 田中先生からは毎週、文化についていろいろな見地から指導を受けられとても幸せである。「文化に上下はない。あるのは違いだけだ。」足利のそば、桐生のフランス料理、佐野のラーメン、館林のうどんなどは一つ一つ「ちがひ」つまり特色をみせながら文化のレベルにまで高まっているものと思う。大変かもしれないが、もっともっと深みを極めて頂き、頂点を目指してもらいたい。他の業種の方も、この街に ありと言われるよう頑張ってください。
 - (9) 同業者と協力して研究会を開いたり、広告宣伝・企画をすることもためになる。ただ、レベルが一定水準までいかないのに同業者と会合を重ねても、握手をしながら殴り合っているのと同じで、足の引っ張り合いか、グチのこぼし合いになることが多い。とりあえずは、自分自身のライバルや目標一社を決め、そこに追いつき追い越せの精神でレベル・アップを図ることが大事。お

互い同士がかなりのレベルになってから、研究会を開いたり、地域の「業界」づくり、「産地」づくりをすること。まずは、自分自身がリーダーの一人になれるよう頑張ろう。

- (10)自分のレベルを上げて初めて他人従業員を雇う、つまり雇用を吸収し、我が街から失業者を一人も出さないということで、地元に貢献できる。
- (11)今はどんな小さな店や会社でもよい。「歴史における個人の役割」という題の本が岩波文庫にあるが、自分の仕事を一所懸命やることが、地域を引っ張り、文化の向上や経済の活性化にまでつながることも多い。頑張ろうではないか。

2. 中学校問題を考える

- (1)スクール・バウチャー制度をそろそろ考えてもよい。それは、子供は各々バウチャー、つまり彼が望む学校どこでも用いることのできる一枚の紙切れを与えられ、彼がそのバウチャーを学校に渡すと政府は一定額をその学校に支払う仕組みだ。学校は、バウチャーによる支払い以上の授業料を徴収しようとするかもしれないし、そうでないかもしれない。この提案では、公立学校は、ちょうど私立学校がやっているように学生たちをその学校に来るよう説得して収入を得なければならない。この競争により、公立学校が社会の要求に対してより早く対応するようになり、また競争が教育のより大きな変革をもたらすことになる。これに加えて、他では受け入れられないような生徒、つまり問題児を受け入れた学校に、ボーナスを与えるような制度も考えてもよい。
*「公共経済学」上=公共部門・公共支出、J・E・ステイグリッツ著、藪下史郎訳 P334 東洋経済新報社 1996 年刊参照。
- (2)「荒れる」中学校は、各教育委員会で特定できているのだから、そこへはとりあえず教育委員会から必要な人数だけ「特別チーム」を派遣して、「荒れ」を収めることも大事。「特別チーム」は、中学の「荒れ」をなくすため警察や検察、家庭裁判所調査官、刑務官、保護観察官や保護司、精神科医やソーシャルワーカー等をはじめとする専門家との研究チームを組織し、「荒れる中学校」の徹底研究をすべきである。
- (3)また、「特別チーム」は、地域で中学生と関係する民間人つまり少年少女野球や少年少女サッカー、柔道、剣道、ピアノ、そろばん、スイミング、習字、英語、学習等の民間教育従事者や、育成会や、ボランティア活動をやっている方々にも呼びかけて協力を願うことも大事。
- (4)荒れている中学校区を地盤とする市町村会議員・県会議員の方々は、毎日でもその中学に行き実情を調査、「教育行政」としてどう取り組むべきかを考え、首長や教育委員会と対策を話し合い、立案することが、納税者に対する責任である。
- (5)特定の先生の熱心な努力だけでは、50 年近く荒れ続けている中学校はなくなる。とりあえずは、(2)で述べた緊急対策をしながら、長期的には先月号の「みにむ」に書かせて頂いた「荒れる中学校の廃校・小学校への統合」や、(1)で述べたような「スクール・バウチャー制度」などの導入についても真剣に研究を重ねるべきかと思う。
- (6)今までと同じことをしていたのでは、全く事態は変わらない。50 年近く荒れ続けたのだから、百年先も荒れた中学のままだ。

3. 社会人の大学・大学院入学ブームを考える

- (1)アメリカの景気が絶好調である原因の一つに、90 年代に入り、中小企業の創業が大幅に増えた、つまり起業家が大幅に増えたことが上げられる。女性や 60 歳以上の起業家も大幅に増えたと言われている。では、なぜ 90 年代に入り起業家が増え、創業が増加し、アメリカ全体の景気をよくすることにまで影響を及ぼしたのか。
- (2)それは、80 年代に入り、アメリカでは、社会人の大学入学ブーム・大学院入学ブーム、とりわけ MBA(経営学修士号)取得ブームがあったからだとは思えてならない。

(3) 高校や専門学校・短大・大学を20歳前後で終えた後、10～20年間仕事をし、30歳～40歳前後になってある程度実務経験を積んだ人がもう一度大学や大学院に入り直して、勉強し直したらどうなるか。特に、経営の勉強を1～2年かけて基礎からやり直したらどうなるか。10年・20年前の学生時代とは違い、教科書に書いてある一行一行が身にしみてよく理解できる。実務家出身の先生や、実務経験を積んだクラスメートとのディスカッションが明日からの自分の仕事のレベルの向上に直結する。頭の中が整理され、よいリフレッシュにもなる。アメリカの1996年の一人当たりのGDPが2820ドルと、ルクセンブルクに続き世界第2位なったのも、一度学校を出た社会人がもう一度学校に入り直して勉強したことも、大きく原因していることと思う。

(4) 東京は、今や社会人の大学学習ブーム。私が2年前から通っている上智大学公開学習センターの各講座は、東京の四谷という中央線特快停車駅の前という好立地に支えられてか、人気はうなぎ登り。夜間や土曜日は社会人でごった返している。私は、英語上級、国際関係論とカルチャー・マーケティングの研究コースをこの一学期は取らせてもらっているが、休む人はほとんどいない。皆さんよく予習をし、また、図書館が利用できるのによく勉強している。終了後は先生方やクラスメートと、学校の食堂や近くの居酒屋でよくディスカッションを楽しんでいる。

公務員・金融・運輸・通信・マスコミ・エンジニアと職業も幅広い。経営者の方も多い。年齢も25歳から65歳以上までと幅広い。社会人の大学学習ブームといってもよい。

大学院や留学を目指している人も多い。特に女性に留学希望が多い。子育てが終わったら留学を希望するという女性も多い。

(5) 我が街の空いている、またこれから空きそうな小中高校の校舎はどのように使われているのであろうか。倉庫同然になっているのなら、是非、市町村立の大学か、市町村立の大学院にしては頂けないであろうか。大学や大学院の設置基準は随分緩和されてきた。文系の大学や大学院なら、努力すれば必ず開講できる。

どこかの大学や大学院を誘致するより、自分の市町村独自でつくった方がはるかに意味がある。「そんなの無理、机上の空論」などと初めからあきらめないで、どのようにしたらできるか、本格的な調査・研究をして頂きたい。

(6) アメリカで80年代の不況の時に、社会人が大学や大学院に戻りコツコツ勉強したように、日本も2000年から10年間は景気が大変なことは目に見えているので、アメリカの社会人に見習い、大学や大学院に戻りコツコツと勉強を積み重ねることが大事かと思う。そのための準備を今すべきだ。

(7) 各市町村立の大学や大学院をつくる意思が首長や議員の皆様がないことが明確であるならば、各市町村の中で、社会人を受け入れる大学や大学院をつくってもよいと考えている人々に最大限の援助を市町村がしてほしい。誰も名乗りを上げなければ、これぞという人に要請してほしい。

(8) 街の人が気軽に行ける大学や大学院があれば、その街は必ず文化レベルが向上し、活性化する。人口も増える。

生涯教育を推進すると言いながら、社会人の入れる市町村立の大学や大学院を設置するための調査・研究を一切していない、調査・研究費を予算計上していないというのは本当におかしい。アメリカの状況や東京の状況を、もっともっと目を大きく開いて見てきてほしい。

4. おわりに-この不況の原因を考える-

(1) こんなにデフレなのに緊縮財政をなぜとり続けるのか、これは政策不況ではないのかと言われはじめた。

(2) その理由は簡単で、大蔵省・日銀・大手金融機関で働く経済政策担当者は、法学部出身で、経済のアマチュアだからだ、というのがサミュエルソン教授の理解だ。私も同感だ。

* 長銀総研エル・1998年4月号3ページ参照。

(3) これからは市民である我々も、経済とは何かについて日本の教科書だけではなく、世界の人々が読んでいる教科書にも目を通し、経済を見る目を世界標準で養わねばと思う。

今日ほど、市民一人一人が真剣に経済とは何かを勉強し、自分自身で判断する能力を身につけなければならない時代はないと思う。

足利の活性化を考える

- 市民が「いつまでも若々しく生きる」街づくりを目指して -

開倫塾

林 明夫

Q : 足利を活性化させるためにはどうしたらよいと林さんは考えますか。

A : (1) 足利がもっている長所を生かしながら、現代社会がもつ問題を解決するという手法で足利の活性化を考えると面白い方法が見つけれられると思います。

(2) 例えば、足利には 150 以上の立派な寺院が星のようにあります。鐘のある寺院も 70 近くあるそうです。宗教家の皆さんのご努力のお陰と、足利市民が信仰心が厚く寺院を大切になさってこられたためと考えられます。相田みつを先生の作品や、若い頃足利で育ったジョージ秋山先生の作品、売野雅生先生の詩などを読ませて頂きますと、信仰心の厚い足利を感じさせるものがあります。

(3) 美しい山や川、平野と寺院とが相まって内面的充実を求める街として最もふさわしい環境が足利にはあると思います。

(4) ところで、足利市の南に位置する埼玉県には、足利市ほど寺院のあるところは余り見かけられません。足利市に近い東京都内など尚のこと、足利市と比べ寺院を見つけることは困難であると言えます。埼玉県や東京の人々は、墓地つまりお墓を確保するのにとても大変な思いをしておられます。

(5) 足利市活性化策の第一は、足利市内外にある寺院にもし可能であればご協力して頂き、埼玉県や東京都の人々ために、菩提寺になって頂くこと。お寺の檀家になって頂いた方は、お墓が足利市内外にあるのですから、定年後は足利の旧中心街にお住まいになって頂くことであります。

(6) 「60 歳をすぎた方も含めすべての市民が、いつまでも若々しく生きることのできる街づくり」を足利市の運命を懸けて戦略的に行うべきと私は思います。

(7) 昔、小児科が街ごとにあったように「老人科」の病院を開設して頂くことを奨励すること。若い人と同じ検査をされるだけで弱ってしまう方がおられます。足利市は「老人科」のメッカであると言われる位まで、ホームドクターとして気軽にかかれる「老人科」の整備が大切であります。

(8) 「いつまでも若々しく生きる」こと、つまり、病気になったときは別として「余りお医者様のお世話にならずに死を迎えられる身体づくり」を徹底的に、また、戦略的に推し進めれば、一人ひとりの幸福にもつながり、足利に住んでいて、また、移り住んで来てよかったと「市民満足度」も 100 % となります。

(9) どのようにしたら「いつまでも若々しく生きる」ことができるか、足利市を挙げて熱い議論をし、ほとんどお金がかからずすぐにも手軽にできる案は、どんどん実行に移すと素晴らしいと思います。

Q : 定年退職後の方に人口の多い埼玉県や東京から足利に移り住んでもらい、「いつまでも若々しく生きる」という夢を現実のものにする。そして、市の中心に住んで頂き足利市内外のお寺を菩提寺にして頂く。面白い考えですね。まだありますか。

A : (1) 60 歳以上の方が増えますと、高齢者医療や介護が必要となりますので、医療や介護を担当して下さる方が、圧倒的に不足します。誰に担当して頂くか。埼玉県や東京にお住まいになる「働くシングルマザー」の方に、足利市に移り住んで頂き、医療や介護を担当して頂くことが一番よいと思います。

- (2)つまり、私の足利活性化策の第二は、「働くシングルマザーにとってやさしい街づくりをして、埼玉県や東京都から足利に、それも中心部に移り住んでもらうということ」です。
- (3)埼玉県や東京都にいる「働くシングルマザー」が住みやすい、また、働きやすい街づくりを足利市を挙げて徹底的に、また、戦略的に推し進めることです。

Q：そんな簡単に「働くシングルマザー」が、埼玉や東京から足利へ来て下さいますかね。

A：(1)思い返すべきは「孟母三遷」(もうぼさんせん)の教えです。子どもが最高の教育を足利で受けられ、働くシングルマザーを温かく迎える環境を整え、上手にPRさえすれば、必ずお子様を連れて来て下さいます。ではどうするか。

- (2)もし、足利市の小学校、中学校、高校の英語の授業をすべて英語で行い、英語を聴き取り、読み、書き、話せるという「英語によるコミュニケーション能力」が、学校で確実に身につけば、お母様方は子どものために足利に居を移すことでしょう。そのためにはどうするか。
- (3)足利市の小学校、中学校、高校で英語を教える先生が一人残らず「第二言語としての英語教師」Teacher of English as a Second Language 略して TESL (テスト) の資格 (大学院修士課程修了) をもち、資格取得後も先生の職にある間は毎年きちんとした研修をずっと受けて頂くこと。
- (4)TESL (テスト) という英語教育専門家の先生方にとって最も魅力的な職場環境を整えることで、足利は日本で一番英語教育に熱心な街になることができます。
- (5)足利の小・中・高校で英語を教える先生を一人の例外もなく TESL の有資格者にして、その先生方に職にある間中きちんとした研修プログラムを用意して教育技術向上に励んでもらうだけで、孟母三遷の教えの通り、埼玉や東京で働くシングルマザーは子どもを連れ足利に居を移します。その位、子をもつ親は、子どもの教育、とりわけ英語教育の重要性を知り尽くしています。
- (6)もし、これに加えて算数や数学の教え方が、足利市の先生は、小学校、中学校、高校の各レベルでどこの学校に行っても日本一に近い程優れているということになれば、足利の魅力は更に増します。理科教育、国語教育、社会科教育、音楽教育、美術教育、技術科・家庭科教育、保健・体育教育、環境教育、福祉教育、国際理解教育、情報教育、道徳教育、そして最も大切な規範教育と一つ一つの分野で足利のすべての小・中・高校は日本一のレベルだと評価されるようになれば、日本国中のお母様方の注目の的に足利市はなります。すべての科目とは言いませんから、とりあえず日本国民のほぼ全員が困りに困っている「英語教育」からスタートすることをご提案いたします。

Q：今までのお話を少しまとめて下さいますか。

A：はい。

- (1)まずは、埼玉県や東京都の60歳以上の方に足利市内外の寺院の檀家になって頂き、少しずつ、足利市に移り住んでもらい、いつまでも若々しく生活して頂く。そのために、老人病院の設立を奨励したり、質の高い高齢者医療、介護のしくみづくりをする。
- (2)埼玉県や東京都の「働くシングルマザー」が住みやすい、また、働きやすい環境を整え、暖かくお迎えし、福祉や医療の担い手になって頂く。
- (3)「第二言語としての英語教師」という大学院修士課程修了の方に足利の小・中・高校すべての英語の授業を担当して頂き、足利の小学校、中学校、高校で英語を学んだ子はコミュニケーションの手段として、高校卒業後英語を不自由なく使いこなせるようになることで、お子様ともどもお母様に足利にきて頂く。
- (4)埼玉県や東京都の方々に足利市の中心に移り住んで頂くには、どのようにしたらよいかを考えた結果、今のような考えをもつにいたりしました。

(5) 足利のもつ素晴らしさを十分生かしながら、高齢化社会、離婚の多い社会、英語教育の不十分な社会という3つの現実を考え、組み合わせたものです。何万人かの人々が、バランスよく増え、街にも活気が出るものと思います。

(6) すぐそばの埼玉県には、700万人近くの人々が、また、電車で1~2時間の東京都には1千万人以上の方々が様々な現代的問題を抱えながらお住まいになられておられます。足利市が現代的な問題を以上のような形で確実に解決することができれば、また、余りお金をかけなくてもいいですから上手にPRできれば、何万人かの人々は足利に確実に移り住むと確信いたします。

Q: ところで、林さんは、足利はどんな街になったらいいと思いますか。

A: (1) 美しい山河、自然、数多くの寺院、日本最古の大学「足利学校」、世界最高水準のアパレル文化、食文化、首都東京まで1~2時間という立地。これ以上望めないと思える内容(中身)が足利にはあります。

(2) ベイトソンに「自然と精神」という著作がありますが、「自然と精神」を大切にしながら「内面的充実」、「穏やかな心」を一人ひとりの市民が自分なりに追い求めることのできる街に足利がなったら素晴らしいと思います。

(3) 年齢に関係なく、自分の夢や目標に向かいどのような形でもいいから勉強し続け、「いつまでも若々しく生きる」ことのできる街に足利がなってもらいたいと思います。そして最終的には、ジョン・スチュアート・ミルの「自由論」ではありませんが、「人間の個性が最も豊かな多様性において発展することが絶対的かつ本質的に重要だ」*と思います。

*ハイエク全集第7巻「福祉国家における自由」春秋社刊 188ページより引用

Q: 最後に一言どうぞ。

A: (1) すべての小・中・高校の英語の先生には、十分な研修の機会を与えて頂きたいです。

(2) その一段として、アシスタント・イングリッシュ・ティーチャーとして外国からお招きする先生には、先程ご紹介した「外国語としての英語教師」TESL(テスト)の資格をもった大学院修士課程修了の方のみ採用すること。もしできれば、今の人数の倍か3倍のTESL(テスト)資格者を採用して頂き、今採用している人数よりも多い人数の方には、「小・中・高校で現在英語を教えている先生のための英語教育専門大学院」(はじめは無認可でも教育委員会やNPOが設立主体になり、スタートさせる)の先生になって頂く。現在の小・中・高校で英語の先生をなさっているすべての方に、2~5年かけて徹底的にTESLの有資格者レベルにまでなって頂く。(空いている学校の教室を使用。夜間や休みの日をフル活用。授業料や教材費は一切無料。公費負担。但し教わる方に研修手当を出す必要はないと思います。何年間か留学をしなければ取得できないTESL(テスト)の資格をもつレベルまで、足利で先生として本格的な勉強ができるのですから)

(3) 韓国の方はなぜ英語が上手なのか。その答えは、この10年位の間には1万人近くTESL(テスト)の資格をもつ英語の先生を入れたからであると言われていました。

(4) この語学教師の資格の存在は、外国で少し語学教育の方法論を学んだ人なら誰でも知っていますが、日本では余り知られていません。教育行政の担当者や英語教育にご関心のおありの方は、是非じっくり調査をして頂きたく希望いたします。

(5) 「先生の教育がすべて」なのが、現代日本の英語教育の最大課題と言えます。